

14. 各領域の活動

＜がん看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

がん看護学領域では、看護相談室事業として、地域の看護職や大学院看護学領域の学生を対象に、がん看護の質向上を目指した「質の高いがん看護実践を検討する会」（以下、ケア検討会）を開催してきた。新型コロナウイルス感染拡大以降、参加者が個別にオンライン参加する方法で開催してきたが、令和5年度より高知県内3ヶ所（高知県立大学池キャンパス・高知県立あき総合病院・高知県立幡多けんみん病院）のがん看護専門看護師の協力を得て Web でつなぐ、サテライト型ケア検討会に変更し、今年度も継続した。令和6年度の年間テーマは「皆で考えよう“認知症をもつがん患者への看護” Part2ーがん患者のACPをいかに支援するかー」で、がんと認知症を併せもつ困難事例に対する支援を検討した。

【第1回】

テーマ：認知症をもつ妻との在宅療養を希望する高齢がん患者への在宅移行支援

日時：令和6年6月8日（土）13:00～15:00

場所：メイン会場；高知県立大学池キャンパス、安芸会場；高知県立あき総合病院、幡多会場；
高知県立幡多けんみん病院（参加者は希望する会場で参加）

参加者：3会場で合計43名参加（看護職者37名、大学院生3名、本学教員3名）

【第2回】

テーマ：家族の希望でがん治療を継続する認知症をもつ高齢がん患者への支援

日時：令和7年1月25日（土曜日）13:00～15:00

場所：メイン会場；高知県立大学池キャンパス、安芸会場；高知県立あき総合病院、幡多会場；
高知県立幡多けんみん病院（参加者は希望する会場で参加）

参加者：3会場で合計39人参加（看護・福祉職者34人、大学院生1人、本学教員4人）

2) リカレント教育

がん看護学領域では、がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、大学院修了生のネットワークづくりの充実を図ることを目的として、がん看護学領域修了生の会“アストラルの会”を運営している。今年度も、Web 会議システムを用いた学習会を2回開催し、事例を通してがん看護専門看護師としてできる支援や、組織のニーズに応じた活動の在り方を検討した。今年度より、参加者全員による実践・近況報告の時間を設け、ネットワークづくりの活性化を図った。

【第1回】

テーマ：倫理的課題のある事例への直接介入のタイミング

事例提供者：がん看護専門看護師 野瀬 智代 氏

日時：令和6年8月3日（土）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：14名（修了生13名、本学教員1名）

【第2回】

テーマ：肺がん・脳転移を有する患者・家族のアセスメントと支援

事例提供者：がん看護専門看護師 今井 ユミ 氏

日時：令和6年12月21日（土）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：17名（修了生16名、本学教員1名）

3) がん看護学特別講義

がん看護学特別講義では、がん看護学領域の修了生が後輩である大学院生や修了生を対象に、修了後のがん看護専門看護師としての役割開発のプロセスや日頃の実践活動について語る機会を提供している。

テーマ：がん看護専門看護師の実践と役割開発

講師：独立行政法人地域医療機能推進機構 九州病院 近藤 恵子 氏（8期生）

日時：令和6年9月15日（日）10:00～12:00

開催方法：オンライン

参加者：13名（本学大学院生4名、修了生8名、本学教員1名）

内容：がん看護専門看護師として認定後から現在までの15年間、2つのがん診療連携拠点病院においてどのような活動を行ってきたのかご講義いただいた。自らが取り組んできた課題や役割開発を日本看護協会の“CNS キャリアラダー”に沿って整理し、変革推進者としてのモデルを示された。大学院生は、がん看護を主軸に組織改革や治療方法の改善にもつなげる姿勢に刺激を受け、自分たちが将来どのように専門看護師としての歩を進めていけばいいのか多くの学びを得ていた。

4) がん教育外部講師派遣事業

令和5年度に施行された第4期がん対策推進基本計画において、がん教育・がんに関する知識の普及啓発は第3期に続いて課題にあげられており、各都道府県でがん教育への取り組みが継続されている。高知県では、がん教育の内容を充実させ、がんに関する正しい知識を理解し、がんを学ぶことを通して健康といのちの大切さに気づくことを目指し、外部講師派遣事業が行われている。今年度は、4名の教員が7カ所の小学生や高校生および教職員を対象にがん教育を実施した。

(1) 日高特別支援学校高知しんほんまち分校

月日：令和6年9月9日（月）

対象：高等部2年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田代 真理

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

(2) 山田特別支援学校

月日：令和6年9月11日（水）

対象：高等部1年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田代 真理

内容：がんについての基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがん、がんと生きるに関する授業

(3) 佐川町立黒岩小学校

月日：令和6年11月15日（金）

対象：小学校5、6年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

内容：がんについて知り、病気に負けないからだづくりについて考えるに関する授業

(4) 中土佐町立久礼小学校

月日：令和6年11月21日（木）

対象：小学校6年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 豊田 邦江

内容：がんについての基礎知識、たばこがん、がん検診の大切さに関する授業

(5) いの町立吾北小学校

月日：令和 6 年 12 月 16 日（月）

対象：小学校 5、6 年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

内容：がんを通して健康や命の大切さを学ぶに関する授業

(6)高知市立布師田小学校

日時：令和 7 年 1 月 20 日（月）

対象：小学校 6 年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 豊田 邦江

内容：がんについて学ぼうに関する授業

(7)香南市立夜須小学校

日時：令和 7 年 2 月 6 日（木）

対象：6 年生、教職員

講師：高知県立大学看護学部 山西 亜紀子

内容：がんの基礎知識、がんと生きる、がんと心のケア、がんに罹患して感じたことに関する授業

2. 研究活動

がん看護学領域では科学研究費助成金を受けて、藤田が研究代表者の「外来治療する高齢がん患者を支える協働型包括的機能評価に基づく統合ケアモデルの開発（基盤研究 B）」に各教員が共同研究者として、継続して研究活動に取り組んだ。また、「高齢がん患者への緩和ケアと認知症ケアに統合モデルの開発（基盤研究 B）」について、第 39 回日本がん看護学会学術集会で発表を行った。がん看護学領域のケア検討会については「サテライト型『質の高いがん看護実践を検討する会』』についての取り組みと評価」のタイトルで、高知県立大学紀要看護学編に投稿した。

3. 活動の評価

ケア検討会では、南北に長い高知県の看護職がより参加しやすい環境でがん看護を学び、地域の看護職者と交流することができるよう、昨年度よりサテライト型ケア検討会を継続している。今年度は、参加対象を訪問看護ステーションや地域包括支援センター、老人保健施設、在宅診療所、医療ソーシャルワーカー、ケアマネージャーなど施設・職種ともに拡大し、多くの参加を得た。増加する認知症をもつ高齢がん患者に対し、多職種・多施設の実践家が対面で意見交換することで支援の視点が広がり、その後の地域連携にもつながっているとの意見が聞かれている。

リカレント教育のアストラルの会では、がん看護専門看護師の認定更新を終えた修了生に事例提供を依頼することで負担軽減を図るなど、会則変更を支援した。修了生同士の活発な意見交換や励ましは、新たな気づきや課題を認識する機会となり、自信を獲得する場となっていた。

4. 次年度の課題

社会貢献活動のケア検討会については、今後も Web 環境などの課題を改善しながら、高知県の看護職のニーズを踏まえた会の運営にとりくんでいく必要がある。ケア検討会参加人数の増加や対象職種の拡大をはかるとともに、各会場のがん看護専門看護師の連携を強化する必要がある。

リカレント教育では参加者が固定しており、新しい修了生だけでなく、様々な分野ですでに活動している修了生も含めて参加しやすい会の運営を支援していくことが課題である。

研究活動については、修了生の論文投稿や発表の支援を行うとともに、がん看護領域における新たな研究テーマへの取り組みが課題である。

＜慢性期看護学領域＞

1. 社会貢献活動

高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業（血管病調整看護師フォローアップ）の実施

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が喫緊の課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に令和元年度より高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

1) 地域の糖尿病重症化予防を推進する連携体制の強化

県下 8 つの参加病院と 6 つの福祉保健所を、安芸、中央東・高知市、中央西・高幡、幡多の 4 ブロックに分けて、地域の糖尿病重症化予防を推進する連携体制の強化支援策を講じた。血管病調整看護師が地域の課題に目を向け解決に向けた活動を行えるよう、「基幹病院合同連絡会議」において、第 8 期高知県保健医療計画のアウトカム指標を視野に入れた課題・成果の可視化、課題抽出と対策を協議する方法を話し合えるよう支援した。また、「ブロック単位の事例検討会」において、重症化ハイリスク者の抱える問題の特徴と地域の支援体制づくりを話し合えるよう支援した。これらの支援は、次年度に向けて血管病調整看護師が地域の中で主体的かつ自律的活動を行えることを目的に実施した。会議への参加者は、8 病院の血管病調整看護師、福祉保健所、市町村保険者、高知県保健政策課担当者、事業担当の本学教職員であり、「基幹病院合同連絡会議」の開催は 5 回、延べ 177 名の参加、「ブロック単位の事例検討会」の開催は 3 回、延べ 84 名参加があった。

2) 公開講座への参加

高知県の主催で「地域における医歯薬連携の促進を目指して」をテーマとして、オンライン研修が開催された。本公開講座は、高知県糖尿病重症化予防プログラムに関係する保健医療従事者を対象としており、事業担当教員も参加し、各地域の糖尿病医療と歯科連携における現状と課題を共有した。

プログラム：

- (1) 高知県の糖尿病重症化予防の取り組みについて
- (2) 令和 6 年度診療報酬改定で示された糖尿病医歯薬連携への期待
- (3) 地域単位での情報交換

2. 次年度の課題

令和 6 年度で高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業は終了するが、血管病重症化予防の現状と課題、及び効果的なケア活動への理解を深められるよう、血管病調整看護師のケア調整活動をテーマにした学習機会をリカレント教育やケア検討会で提供し、高知県血管病調整看護師への後方支援を継続する。

＜急性期看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質を高めることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。昨年度と引き続きケア検討会のテーマを「救急・集中治療領域における緩和ケア」とし、2回開催した。

第1回は、2024年6月11日に対面＋オンラインで開催し、参加者は32名であった。Stanford A型の急性大動脈解離で緊急手術後、せん妄となった事例について検討した。緊急手術による影響、現実認識ができていないことによる不安や恐怖、面会制限による孤独感などの心理的苦痛があることなどについてディスカッションし、患者の身体的苦痛の緩和だけではなく、社会的、心理的苦痛の緩和の重要性や緩和ケアとしての介入について振り返った。

第2回は、2025年2月13日に対面＋オンラインで開催し、参加者は13名であった。尿路感染症による敗血症の事例について検討した。急激に全身状態が悪化する患者に医療者としてどのように関わるか、目の前で患者の状態が悪化していくことに対する看護師の苦悩や全身状態が悪い中での緩和ケアを実践することへの困難さについて共有した。

第1回、2回ともクリティカルケア看護の中で重要視されているPICS、せん妄を中心としたミニレクチャーも行ったことで、日々実践している看護の振り返りにもつながった。

2) リカレント教育

(1) 専門看護師認定審査への支援および修了後の継続学習

今年度はオンラインにて専門看護師認定審査に向けた相談会を2回開催し、のべ2名の修了生が参加した。

また、急性・重症患者看護専門看護師（CCNS）の高度な看護実践を検討する事例検討会を4回開催し、のべ9名の修了生が参加した。現在CCNSとして活躍する修了生が事例を提供し、高度な看護実践について他の専門看護師とともにディスカッションすることを通じて、事例をまとめ、その成果を日本クリティカルケア看護学会学術集会で発表した。

2. 研究活動について

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費や外部研究機関の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

2020年度から「ICUにおける人工呼吸器装着患者の集中治療後症候群予防のケアガイドライン開発」（研究代表者：神家ひとみ）、2021年度から「クリティカルケア看護師の緩和ケアコンピテンシー育成プログラムの開発」（研究代表者：大川宣容）、2023年度から「高齢消化器がん患者の機能変化と生活の融合を目指した周術期回復支援プログラムの開発」（研究代表者：森本紗磨美）、「高齢者股関節手術前の運動・認知介入による術後せん妄予防の検討」（研究代表者：村川由加理）の研究に取り組んでいる。他領域教員との共同研究として、2023年度から「Transitionを基盤としたICU看護師の成長を導く支援プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容、神家ひとみ、森本紗磨美）に取り組んでいる。研究成果の公表は、学会発表2件、論文投稿1件であった。

さらに、他機関の共同研究として、「家族との協働型エンドオブライフケア実践能力を高める看護遠隔教育プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容）、「e-ラーニングによる介護者のためのエンハンスメント・プログラム活用の在宅療養支援」（研究分担者：大川宣容）、「高齢在宅療養者の急変対応スキル獲得に向けた訪問看護師遠隔教育プログラムの開発」（研究分担者：大川宣容）に取り組ん

でいる。

今年度は卒業生への研究支援として 2023 年度看護研究（指導教員：村川由加理）を第 44 回日本看護科学学会学術集会で発表した。

3. 大学院関連

新たに 2 名の急性・重症患者看護専門看護師が誕生した。

4. 評価および次年度の課題

昨年度よりケア検討会も修了生との事例検討会もオンライン＋対面のハイブリッド方式で開催した。ハイブリッド開催により、高知県内の看護師も参加しやすくなり、さらに県外からの参加者も得ることができた。

また、今年度はケア検討会開催の呼びかけ時期の工夫や実習関連施設へのご案内、院生や修了生と臨床看護師とのつながりから事例検討会の広報を行い、参加者を広く募ることができた。次年度も引き続き、今年度実施した広報、運営方法を取りながら、より効果的な広報、運営方法を検討していく。

在学中からのアプローチにより、卒業生の看護研究の成果発表に向けて支援ができた。引き続き研究成果の公表に向けて取り組みを継続する。

＜小児看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) 小児看護学領域の大学院在学生・修了生の交流会

本年度の交流会は、対面とオンライン会議システムを活用したハイブリッド形式とし、7月21日(日)に開催した。大学院在学生、修了生ならびに教員を含めた13名が参加し、現在取り組んでいることなどの近況報告を行った。修了後の活動に関する在 student からの質問に対して、修了生から活動の実際や組織から求められる役割に関する紹介があり、難しいと感じることや課題への取り組みなどについても具体的に意見交換を行うことができた。その他、修了生が継続して取り組んでいる疾患をもつ子どもの体調管理に関する研究の紹介もあり、参加者と意見交換を行うことができた。交流会を通して、修了生と在 student とのネットワークが広がり、交流や情報交換の場としても有効であったことから、次年度も開催していきたい。

2) 小児看護学領域事例検討会

修了生や大学院在 student を対象として、例年、年3回程度開催していたが、感染症のリスクが続いていることや、オンライン会議システムでは個人情報漏洩の危険があるため、実施を見送った。今後の開催方法について検討していく予定である。

3) 小児看護学領域特別講義

講師：永井友里氏（前高知医療センター 小児看護専門看護師）

日時：2025年3月4日（火）13時～16時

場所：高知県立大学看護学部3階 C310 講義室

参加者：10名（大学院在 student 7名、教員3名）

小児看護専門看護師に必要な実践能力として6つの機能の実際・展開について、今年度は実践機能、調整機能、倫理調整機能に焦点を当てた活動の実際をプレゼンテーションしていただき、参加者ととともにディスカッションを行う企画を実施した。具体的には、講師より専門看護師となるまでの活動の実際をはじめ、専門看護師としてキャリアを積み重ねる中で、多様かつ複雑な疾患とともに成長発達していく子どもたちに提供される最善となるケアの探求・継続の実現に向けた活動における判断基準や思考過程を説明された。参加者それぞれにおいて、授業で学んだことの意味を深く理解したり、実践演習での学びの強化や自身の課題の明確化となったり、専門看護師として将来属する組織の一員として活動する中で明確な目標を立てて実践能力を発揮していくイメージにつながる貴重な機会となった。

4) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 継続教育支援

毎年、高知医療センターすこやかAフロアと連携して新人看護師を対象とした教育支援を行っている。「けいれんの子どもへの対応」をテーマとし、新人教育の進捗状況に応じた部署のニーズに合わせてシミュレーション勉強会を行った。勉強会は2回開催し、それぞれ新人看護師と指導者である看護師と副科長が参加し、基礎的なけいれんの知識を学習するとともに、複数の場面を通してけいれん時の子どもの観察やケアの実際について参加者同士で意見交換を行った。次年度は、部署との連携体制を強化し、ニーズに応じた教育支援を実施していく予定である。

【第1回】2024年12月20日（金）17時30分～18時30分

場所：高知医療センター

参加者：6名（教員3名含む）

【第2回】2025年2月21日（金）17時30分～18時30分

場所：高知医療センター

参加者：6名（教員4名含む）

(2) 赤ちゃん同窓会

本年度も各種感染症の流行に伴い、開催中止となった。

(3) ナーシングカフェ：小児看護の魅力を語る会

本年度は、高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業の企画であるナーシングカフェとして、看護学部1回生から4回生を対象に、平井葵氏より小児看護の魅力についてパワーポイントを用いて30分間語っていただき、その後、参加者とのフリーディスカッションを30分間実施した。参加者それぞれが興味関心のある子どもに関する質問を行い、平井氏の考えを改めて教えてもらうことを通して、子どもたちの看護に携わる将来像をイメージしながら意見交換を行うことができた。

日時：2025年2月20日（木）14時30分～15時30分

場所：高知県立大学看護学部2階C215

参加者：9名（4回生4名、3回生2名、1回生1名、教員2名）

5) その他の活動（ボランティア活動）

(1) 高知新聞社主催の「赤ちゃん会」看護学部学生の有償ボランティアのサポート

日時：2024年4月14日（日）8時～16時

場所：春野総合運動公園体育館

参加者：33名（4回生24名、3回生8名、教員1名）

「赤ちゃん会」では、生後3ヶ月から1歳6ヶ月までの子どもを対象に、身体測定や小児科医の診察、歯科検診、子育て相談などを行っている。2020年よりCOVID-19感染拡大のため一時中止となっていたが、今年度より再開されたため、看護学部の学生が有償ボランティアとして参加できるよう支援を行った。参加した学生は、看護師や助産師とともに子どもの身体計測や記録の介助、物品の補充や整理等を行い、子どもの成長発達を支える地域の取り組みについて理解を深めていた。

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

小児看護学領域では、各教員が研究代表者として、また共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「成人期に移行する心疾患の子どもと親の軌跡を支援する医療地域連携プログラムの開発」（研究代表者：高谷恭子 2023年 - 2026年）、「血液・腫瘍疾患の青年のSDMを支援する専門看護師の家族協働型実践プログラムの開発」（研究代表者：有田直子 2023年 - 2026年）。詳細は教員の活動、研究に関する報告参照。

また、他大学との共同研究、ならびに、科学研究費助成金以外の外部資金を得た共同研究にも取り組んでいる。

2) 修士論文・博士論文の公表への支援

令和 6 年度公表された修士論文、博士論文については以下に記す。

【博士論文】

- ・石橋かず代, 中野綾美 (2024) 青年期小児慢性疾患患者のセルフマネジメントにおける自立過程と影響する要因に関する文献検討, 高知女子大学看護学会誌, 49(2), 16-32.

【修士論文】

- ・佃勇輝, 高谷恭子, 中野綾美 (2024) 医療的ケア児を育てる親の南海トラフ地震に向けた準備性, 日本小児看護学会第 34 回学術集会, 大阪

3. 評価と次年度の課題

社会貢献活動については、本年度もオンライン会議システムを活用して、大学院修了生ならびに在学学生、教員との交流を行うことによって、小児看護専門看護師の実践能力に関する情報交換を行ったり、研究活動の推進に向けた検討を行うなど、継続支援を実施することができた。また、小児看護学領域のみならず、他領域の大学院生も含めた特別講義を開催できたことによって、在籍中から専門看護師としての将来ビジョンを描きやすくする機会にもつながった。したがって、次年度はオンライン会議システムの活用と対面によるハイブリット形式を用いて、遠方の修了生や専門職者が参加しやすくなる事例検討会・特別講義を計画して、修了生・在学学生の継続支援に取り組んでいく。

また、本年度は、臨地実習における学生の学びを確保するために、非常勤教員を迎えて臨地実習を展開できたことは、今後の病院施設と研究機関とのつながりを強化することや、それぞれの強みを活かした共同参画に向けた可能性の拡大になる機会を得た。よって、病院施設のニーズに応じた臨床実践能力の向上、看護実践モデル等の開発・検証に関する共同研究にも取り組んでいきたい。なお、研究活動については、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿に取り組んでいくとともに、各教員または共同研究として取り組んでいる研究活動の推進に力を注いでいくことが課題である。

＜母性・助産看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

令和6年11月8日（金）に「回旋異常のケア」をテーマとして、Web 会議システムを用いた検討会を行った。参加者は20名で、県内外の開業助産師やクリニック、病院に勤務する助産師14名と、領域教員6名であった。回旋異常に関する事例を提供いただき参加者で共有後、各施設や個人の助産師が実践しているケアの情報交換を行った。昨今の女性の体の特徴を踏まえた回旋異常の予防方法や産婦の身体面だけでなく、精神面にに関わり産婦が安心してお産に向き合える様々な具体的なケアの内容についての共有が行われた。さらに書籍や文献から回旋異常についての機序やケアについても共有することができ、近年増加している回旋異常について多方面から考える機会となった。

2) 令和6年度母性・助産看護学領域交流会

令和6年5月24日（金）に、Web 会議システムを使用して交流会を行った。県内外の卒業生3名と領域教員5名が参加し、近況を共有した。

3) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース BLSO in 高知

医療センターを会場として令和6年11月2日に開催された。本事業は高知県内の救急救命士や医師、看護師を対象とし、病院外や救急外来での急な分娩の対応、産科救急の初期対応を学ぶ研修であり包括的連携事業として実施している。領域教員2名（嶋岡暢希・飯田悠花）がアシスタントとして参加した。

4) 高知県内小・中高校における「いのちの教育」出前講座講師

高知県看護協会より依頼を受け、11月に小学校3校計240名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。うち1校には領域教員2名（前田愛友香・徳岡麻由）の他、高知医療センター助産師1名、助産コース4回生3名と連携して運営した。12～1月には高校1校の各学年それぞれ計534名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。2月は小学校1校100名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。また、県教育委員会による外部講師派遣事業からの依頼により、特別支援学校1校、小学校1校計52名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。本学の出前講座への依頼により中学校1校6名にいのちの教育を実施した（企画・実施：徳岡麻由）。

5) 高知県周産期医療施設の看護・助産関係者間の意見交換会

高知県内周産期医療施設の看護・助産管理者、高知県看護協会助産師職能委員等を対象に高知県周産期医療協議会副会長の永井立平医師を交えての意見交換会を令和6年3月14日に開催した（主催：高知県看護協会・高知県助産師会、会場：本学看護学部棟 C220、出席者：29名）。企画、参加者との調整、運営に領域教員3名（嶋岡暢希・西内舞里・徳岡麻由）が携わった。

2. 学習会

母性・助産看護学に関する学習会（企画・運営：岩崎順子・徳岡麻由）を、Web 会議システムにて7回開催し、県内外の助産師、他大学を含む母性・助産領域教員が参加した。下記をテーマに、助産看護活動や先行研究を通じた意見交換を行った。

〔第1回〕日時：令和6年5月28日（火）17：30～18：30

テーマ：『助産師のキャリアとライフワーク』

- 参加者：5名
- [第2回] 日時：令和6年7月17日（水）18：00～19：00
テーマ：『包括的性教育①』
参加者 15名
- [第3回] 日時：令和6年9月10日（火）18：00～19：00
テーマ：『包括的性教育②』
参加者 9名
- [第4回] 日時：令和6年10月23日（水）18：00～19：00
テーマ：『絵本を通して伝える子育ての支援 ～ひかり文庫での活動報告～』
参加者 15名
- [第5回] 日時：令和6年11月20日（水）18：00～19：00
テーマ：『1人の助産師の働き方～総合周産期からクリニック、助産院、
アルバイト、にわとり飼育』
参加者 11名
- [第6回] 日時：令和7年1月29日（水）18：00～19：00
テーマ：『助産師トレーナーが行う身体的アプローチ～開業3年目を迎えて』
参加者：14名
- [第7回] 日時：令和7年2月19日（水）18：00～19：00
テーマ：『胎児期、新生児期からのベビーコミュニケーション術
～おなかの中から子育てしよう♪～』
参加者：14名

3. 研究活動

母性・助産看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。2021年度から「周産期医療施設における両親を対象とした妊産婦健診ケアモデルの開発と検証」（研究代表者：嶋岡暢希）、2022年度から「Family Confidence を高める乳児家族ハイブリッド型看護介入モデル開発」（研究代表者：岩崎順子）、2024年度から「学校で性教育を実施する助産師のコンピテンシー」（研究代表者：徳岡 麻由）の研究に取り組んでいる。

領域教員2名（嶋岡暢希・徳岡麻由）が高知県看護協会生きる力を育むいのちの教育検討委員会委員として高知新聞社「生命（いのち）の基金」助成金を得て「学校教員がとらえる中学生の自己肯定感」の研究に取り組んでいる。

4. 評価及び次年度の課題あるいは活動方針

本年度は、社会貢献活動、学習会、研究活動等を通じて、学外関係者とのネットワークが着実に広がり、県内の周産期医療に関する情報共有や意見交換が活発にされた。これらの活動によって、教育・研究・地域貢献をつなぐ活動基盤が形成されつつある。

次年度は、これまでのネットワークを活用し、教員自身の関心に基づいた実践や研究領域を明確化することで、地域課題に即した研究活動を計画的に推進していきたい。

＜老人看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) 看護相談室（ケア検討会）

2024年6月11日（火）に「身体拘束最小化」について、Webで学習会とディスカッションを実施した。

2024年度の診療報酬改定で「身体拘束の最小化に取り組んでいるのか」入院医療全般に問われるようになった。そのため、まず「身体拘束最小化」とは何かについて学び、その後、参加（修了生4名と博士前期課程在籍の2名）と教員3名でディスカッションを実施した。病院で勤務する修了生から身体拘束を実施するときにジレンマに陥り躊躇する看護師もいるが、安全面の視点から実施を続ける看護師もいることがわかった。参加者からは身体拘束を実施した時は、早期に解除できるようにカンファレンスを実施することや身体拘束を最小限にできるような取り組みを実施していくことの必要性が話し合われた。

2) リカレント教育

研究の項、参照。

2. 研究活動

「急性期病院に入院中の認知症高齢者に対する効果的パッケージの開発」（2019～2024年、基盤研究C、研究代表者、竹崎久美子）に取り組んだ。本年度は、病院などでの認知症の疾患やケアなどの教育プログラムについて、教員だけではなく病院で勤務している修了生と一緒に検討をおこなった。

3. 教育的活動

1 回生のふれあい看護実習では、地域で生活する高齢者のイメージについて、実習前後の比較を実施した。実習前は身体的心理的社会的に脆弱なイメージを持つ学生が多かったが、宅老所での関りの中で高齢者に対するイメージを好転的に捉えることができるようになり、「強み」に目を向けることができるようになった。

2 回生の「老人の健康と看護」「老人看護援助論」では、ふれあい看護実習の体験から疾患を持ちながら生活をする人として捉えるとともに、高齢者の特徴を踏まえた疾患のケアについて学ぶことができるように行った。グループワークを適宜実施したことで他の学生と意見を共有することができた。高齢者の「発達」という視点も組み入れながら授業を展開していった。

4 回生の老人看護総合実習では、老人の発達の視点や身体的視点、そして病態や地域生活など包括的に捉えることができるように、実習施設の協力を得ながらカンファレンスなどを通して実習目標に達することができたと思う。

4. 評価および次年度の課題

本年度は、ケア検討会が1回のみで開催となった。病院などへ広報活動不足が要因の一つであると思う。テーマとしては、今年の診療報酬改定により重要な内容であると考えられたが、臨床の取り組みを検討するには時期尚早の感があり、まずは先駆的な事例などについてもっと学ぶところからの企画が必要であったと考えている。今後は、広報活動や運営方法について検討していくことが必要である。研究活動については、本年度が最終年度であり教育プログラムを高知医療センターで講演することで成果をみせることができたと思う。次年度は学会等での公表を検討していくことが必要である。

<精神看護学領域>

1. 活動

1) 社会貢献活動

(1) 看護相談室（ケア検討会）

本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を4回実施した。

① 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和6年6月20日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、話題提供施設、Web 開催

参加者：11名(本学大学院修了生1名、本学卒業生1名、精神看護専門看護師7名、教員2名)

内 容：修了生が所属組織で取り組んでいる「精神科クリニカルパス（セルフケア OAT ユニット）」の紹介を行い、参加者間で検討するプログラム中心のコンサルテーションとして実施した。OAT ユニットは、精神科で実践している看護を可視化し、患者のケアに活用しようとする試みで、OAT ユニットの開発と実装に向けた課題を、参加者が実践事例を想定しながらディスカッションした。本会を通して、出てきた課題に取り組み、精神科救急病棟での導入に向け洗練化していくこととなった。

② 第2回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和6年9月19日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：16名〈本学大学院生1名、本学大学院修了生1名、精神看護専門看護師10名、他大学教員1名、教員3名〉

内 容：「外部のリソースとして CNS 活動を実践する」をテーマに、CNS の役割について検討した。精神科病院の外部コンサルタントとして活動している専門看護師より、外部の組織に参入する際の配慮について話題提供され、参加者間で情報交換を行った。病棟のパワーバランスを考慮することや、CNS の見立ての伝え方を意識すること、依頼者とともに目標の共有化・明確化を図り成果を示すことなどについて、実践事例を交えてディスカッションを行った。

③ 第3回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和6年12月19日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：12名〈精神看護専門看護師8名、本学修了生1名、教員3名〉

内 容：「CNS の抱える陰性感情にどう向き合うか」をテーマに、参加者間で意見交換を行った。ディスカッションを通して組織の状況や組織と CNS の関係性、CNS に対する組織の期待など、客観的な視点で対象組織をアセスメントすることができた。また、組織のなかでの CNS の立ち位置や役割を明確にすること、変革推進者（Change agent）としての CNS のあり方について考える機会となった。

④ 第4回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

日 時：令和7年3月13日(木) 19:00-21:00

場 所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web 開催

参加者：11名〈精神看護専門看護師7名、小児看護専門看護師1名、教員3名〉

内 容：「精神看護 CNS の救急病床における役割開発を考える～認定から1年を振り返って～」というテーマで意見交換を行った。救命救急病棟において精神看護の専門性をいかにして発揮し、組織の強みを活かしたチーム・ビルディングを行っていくのかについて、CNS の役割と機能を参加者間で検討した。日常業務を通したモデリングの役割（教育的機能）、スタッフへの情緒的支援、相談、倫理調整等の役割につながるものが再確認できた。

(2) 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

第34回日本精神保健看護学会学術集会（国際医療福祉大学成田キャンパス；千葉県成田市）の開催に合わせ、精神看護学領域交流会を実施した。学会では、本学の修了生や教員によるシンポジウムやワークショップも開催され、精神科臨床における看護外来の専門性について参加者とともに考える機会となった。1日目の夜には精神看護学領域の交流会を開催した。対面での交流会は数年ぶりの開催となり、少人数ながら近況を報告しあった。次年度以降も、卒業生・修了生との交流を深める機会を設けたいと考える。

(3) 精神科病院におけるボランティア活動

高知県内の精神科病院が行う催し物に、学生がボランティアとして参加していたが、本年度も病院側からのボランティア募集がなく、活動は実施していない。次年度はボランティアの開催予定について病院側に確認をとり、学生のボランティア参加の可否については検討していく。学生が主体的に精神障害をもつ人との交流が持てるよう環境を整えていく。

2) 研究

(1) 教員の研究活動

精神看護学領域では、それぞれの教員が研究助成を受け、研究に取り組んでいる。「認知症の人と家族の伴奏を支援する家族看護援助モデルの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：田井雅子 2021-2024 年度)、「BPSD 緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護一介護協同介入モデルの作成」(科学研究費助成金 研究代表者：畠山卓也 2019-2024 年度)、「精神科高度実践看護師の行う外来看護活動の好事例を活用した看護外来支援モデルの構築」(科学研究費助成金 研究代表者：畠山卓也 2024-2027 年度)、「双極性障害をもつ人と家族へのメンタルヘルスリテラシー獲得・向上のための看護方略」(科学研究費助成金 研究代表者：池内香 2022-2024 年度)、「双極性障害をもつ人と家族による当事者参加型セルフモニタリングツールの開発」(科学研究費助成金 研究代表者：池内香 2024-2026 年度)に取り組んでいる。

研究成果として、第34回日本精神保健看護学会学術集会にて発表した。また、前年度戦略研究として取り組んだものを第29回日本老年看護学会学術集会にて発表した。

(2) 大学院生・学部卒業生の学会発表支援

博士後期課程修了生の海外ジャーナル誌への投稿支援を行った。

博士前期課程修了生の第44回日本看護科学学会学術集会での発表支援、学会誌への投稿支援を行った。

2. 評価と次年度の課題

他施設との連携においては、各教員が教育研究活動を通して関係構築をしている。特に本年度は高知県立あき総合病院での新人指導看護師への支援を行い、教育研究活動のフィールドを

拡大している。今後も他施設や地域のニーズに関する情報収集を行い、教育研究活動をすすめていく。看護相談室においては、今年度も Web を用いた遠隔開催となった。全 4 回の開催となり、県内外から多くの専門看護師、修了生が参加した。修了生からの紹介で、他大学修了の精神看護専門看護師が参加することがあり、参加者は拡大している。また、今後も卒業生や修了生の学会発表、論文投稿等の支援を行っていく。

<家族看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

今年度は、臨床で出会うご家族へのケアについて地域の皆様と一緒に学び合うケア検討会として、地域の医療職や卒業生、修了生を対象にオンラインで開催した。

日 時：令和6年10月29日（火）18:30～20:30

参加者：卒業生1名、修了生5名、大学院生1名、地域の看護職7名、教員4名

事例検討：脳梗塞を発症後にDNARとなった患者の家族への関わりと支援

事例提供者：修了生

2) リカレント教育

大学院修了生への継続的なサポートの一環として、リカレント教育を実施した。年度当初に年間の開催計画を提示し、修了生から提供された事例についての事例検討や教員によるテーマに関する講義とディスカッションをオンラインで実施した。

事例検討会では、修了生から「がんターミナル期にある療養者とその家族の在宅ケアに関する事例」や「感染症により脳死状態となった子どもとその家族の支援」などの様々な状況や健康問題を抱える家族の事例や、実際の家族支援の状況を提供していただいた。

事例提供者に場面を語っていただき、参加者からの質問を通して家族の体験への理解を深め、事例家族への看護支援の方略を検討した。

【第1回】

日 時：令和6年5月28日(火)18:30～20:30

参加者：修了生3名、大学院生2名、教員5名

事例検討会：がんターミナル期にある療養者とその家族の在宅ケアに関する事例

事例提供者：修了生

【第2回】

日 時：令和6年6月18日(火)18:30～20:30

参加者：修了生3名、大学院生3名、教員5名

テーマ：家族の変化と看護1 役割の視点から

講 師：瓜生浩子

【第3回】

日 時：令和6年7月30日(火)18:30～20:30

参加者：修了生2名、大学院生3名、教員5名

事例検討：感染症により脳死状態となった子どもとその家族の支援

事例提供者：修了生

【第4回】

日 時：令和6年9月17日(火)18:30～20:30

参加者：修了生2名、大学院生1名、教員4名

テーマ：家族の変化と看護2 関係性の視点から

講 師：瓜生浩子

【第5回】

ケア検討会として開催

【第6回】

日 時：令和6年11月26日(火)18:30～20:30

参加者：修了生6名、大学院生2名、教員5名

テーマ：実践的に学ぼう！家族の思いを引き出すわざ

講 師：源田美香

【第7回】

参加者少数のため開催見送り

【第8回】

参加者少数のため開催見送り

【第9回】

日 時：令和7年3月4日（火）18:30～20:40

参加者：修了生6名、大学院生3名、教員5名

テーマ：実践的に学ぼう！家族の合意を促すわざ

講 師：長戸和子

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

家族看護学領域の教員それぞれが研究代表者として、また、共同研究者として科学研究費助成金を受けて引き続き研究活動に取り組んでいる。研究代表者として助成を受けている研究課題は、「慢性心不全患者・家族のアドバンス・ケア・プランニング支援ガイドラインの開発」（研究代表者：長戸和子、2020～2024年度）、「患者・家族と看護者間のコンフリクトの発生・悪化を予防する教育プログラムの開発」（研究代表者：瓜生浩子、2020～2024年度）、「学童期にある発達障害児の家族の家族ストレングスを促進するケアプログラムの開発」（研究代表者：源田美香、2020～2024年度）である。

このほか、研究成果として高知女子大学看護学会誌に原著論文1編、研究報告1編の論文投稿を行った。

3. 活動の評価

今年度は昨年度に引き続き、地域の専門職者を対象としたケア検討会を開催することができた。オンライン開催にすることで、県内外から多数の参加があった。今回は看護職以外の方もご参加いただき、事例提供者を中心に少人数グループでのディスカッションを取り入れて、全員が家族の生活など多角的な側面から積極的に意見交換を行うことができた。地域の専門職者にもこのような機会への参加ニーズがあることがわかった。

修了生対象のリカレント教育は、5回開催した。家族支援専門看護師の資格を有する修了生の参加は、事例の提供を通して自己の実践を振り返り、他施設の家族支援専門看護師と情報交換する機会となり、相互研鑽や情報交換の機会となっていた。また、家族支援専門看護師の資格取得を目指す修了生にとっては、高度実践看護師としての活動のビジョンや方向性を考える機会となっていた。そして、在学生にとっては、家族看護実践の実際やその中での課題を知り、ロールモデルを得る機会となった。昨年度と同様に、年度当初に年間計画を提示していたため、それぞれの予定や関心に合わせて参加することができたと考える。なお、12月と1月は参加申し込み者が少なく、開催を見送った。感染症の流行時期と重なっていたため、臨床にいる修了生は繁忙な状況から参加が難しかったものと考ええる。

研究活動に関しては、それぞれ、研究課題に個々で取り組んだが、互いの研究内容について共有

し意見交換する機会を持つことができなかった。

4. 次年度の課題

リカレント教育・ケア検討会は次年度も継続する。県外からの参加者や仕事終わりに駆けつけて参加する方が多かったため、今後も引き続き Web ミーティングツールを活用していく。開催時期については、経年の参加数を考慮しつつ次年度の年間計画を検討する。

研究活動に関しては、修了生の学会発表、論文投稿の支援に取り組むとともに、教員の研究力の向上を目指して、研究に関するディスカッションの機会を設けることや論文投稿の促進、修了生との共同研究などに取り組んでいく。

<在宅看護学領域>

1.社会貢献活動

1)ケア検討会

看護学部看護相談室事業として、在宅看護学領域ケア検討会を2回実施した。看護職以外（言語聴覚士、ケアマネジャー）の参加もあり、テーマに沿って、職種を超えて意見交換を行うことができた。

①第1回

日時：令和6年7月11日(木) 18:30～20:30

開催方法：Web開催

参加者：14名

職種別：看護師13名(うち在宅看護専門看護師1名)、言語聴覚士1名

テーマ：神経難病を抱える壮年期在宅療養者の生活の変化に合わせた支援を考える

内容：

療養者さんの病状の進行や家族の会議状況の変化を見越しながら、在宅療養を継続するためのケアを検討した。病状の進行に合わせて、本人の望みが変わる場合もあるので、その時の選択肢を広げておけるような情報提供を行うことが求められていると再認識した。

また、ACPの必要性を支援者が意識していても、療養者本人は直面できないことがあるため、療養者本人のタイミングで意思決定できるよう関わる必要性を認識した。

②第2回

日時：令和7年2月19日(水) 18:30～20:30

開催方法：対面開催（本学共用棟D220教室）

参加者：21名

職種別：看護師11名(うち在宅看護専門看護師2名)、介護支援専門員7名、

メディカルソーシャルワーカー1名、社会福祉士1名、歯科医師1名、

テーマ：生活保護受給世帯において誤嚥性肺炎を繰り返す夫と妻の事例：

生活保護費の受給停止が招く課題

内容：

経済的な課題を抱えた療養者とその家族について、家族の歴史や現在の介護力をふまえながら生活の状況を整理し、安全や尊厳が守られない場合の対応方法や連絡先について共有した。家族員それぞれが望む生活を支えるために、まずはしっかりと信頼関係を形成し、行動の元になっている心理の理解の重要性を話し合った。また、多職種で療養者とその家族を支えるためのチーム形成について、それぞれの職種から意見交換をし、交流を深める場となった。

2)修了生交流会

日時：令和6年8月4日(日) 9:00～12:10

開催方法：高知県立大学大学院看護学研究科の在宅看護方法論Ⅲの授業に参加

参加者：修了生4名、教員3名

テーマ：「在宅看護における質改善にむけたCNSの役割と機能」

講師：平原優美先生（日本訪問看護財団常任理事）（在宅看護CNS）

内容：

大学院の授業ではあるが、修了生、教員が参加し学びを深めることができた。また、参加者間の交流の場となり、それぞれの活動の場での困りごとなどの相談の場ともなった。

2. 研究活動

1) 研究発表

①論文発表

日本看護シミュレーションラーニング学会誌に1件、Nursing Reportsに1件、JMA Journalに1件、Nutrition Research and Practiceに1件、BMC Cancerに1件、Social scienceに1件、Medicineに1件、PCN Reportsに1件、Psychiatry Internationalに1件の論文発表を行った。

②学会発表

第29回日本在宅ケア学会学術集会で3件、日本精神保健看護学会第34回学術集会で2件、第71回日本小児保健協会学術集会で1件、日本地域看護学会第27回学術集会で2件、第6回日本在宅医療連合学会大会で1件、第44回日本看護科学学会学術集会で3件、第39回日本がん看護学会学術集会で1件、日本家族看護第31回学術集会で1件、日本緩和医療学会第6回中国・四国支部学術大会で1件、日本家族看護第31回学術集会交流集会で1件の発表を行った。

日本在宅医療連合学会第6回地域フォーラム四国シンポジウムでシンポジストとして1件の発表を行った。

2) 活動中の研究

科学研究費助成事業(以下、科研)では、研究代表者として3件、研究分担者として6件に参画している。

また、金沢医科大学奨励研究1件、生命の基金より助成を受け1件の研究を行っている。その他、外部の大学と連携して1件の研究を行っている。

3. 評価

ケア検討会は2回開催することができた。1回目はWeb開催で、移動の負担が少なく参加しやすいメリットがあった。2回目はコロナ禍以降5年ぶりの対面開催であり、どちらの開催方法もメリットがあるため、参加者の意見も聞きながら、有意義な会となるような運営に努める必要がある。また、いずれの回も看護職以外の参加があり、職種の専門性をもとにした意見交換を行うことができた。

研究活動では、多くの研究発表を行うことができた。一方で遅れがちな研究もあるため、定期的な進捗状況の確認や、研究活動促進に向けた取り組みが必要である。

4. 次年度の課題

1) 社会貢献活動

令和7年度に引き続き(1)ケア検討会の開催:2回、(2)修了生交流会、(3)健康長寿研究センター事業の展開:①中山間地域等訪問看護師育成講座、②高知県介護職員喀痰吸引等研修、③入退院支援事業を実施していく。それぞれの活動においてまたは①、②においては、参加者人数を増やすことが次年度の課題である。活動に参加した方が、参加目的を達成し、自身の新たな知見・技術を獲得できるようなプログラム内容を検討する必要がある。

2) 研究活動

在宅看護領域教員が主担当・分担している科学研究費助成事業(以下、科研)を滞りなく進めていくことが課題である。また、終了している研究について、学会発表、論文投稿を進めていく。

＜地域看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) 高知県保健師人材育成

詳細は、健康長寿センターにおける看護学部の活動、高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動を参照。

高知県保健師人材育成プログラムは、高知県健康政策部保健政策課と協働で取り組んでいる。集合研修は、新任期保健師、中堅期（前期）保健師を対象に行った。また、新任期保健師の人材育成に向け、プリセプター能力育成研修にも取り組んでいる。

管内市町村を対象とした新任期保健師研修会では、幡多福祉保健所で、新任期保健師 17 名を対象に、12 月 10 日に「保健師のプレゼンテーションスキルについて」、講義及び演習を行った。

また、人材育成関係事業計画と行政保健師確保対策、その他情報共有および次年度のガイドライン改定に向けた意見交換を、高知県、高知市及び各種団体、高知県内の教育機関と共に行った。

2) 地域保健福祉活動報告会

幡多福祉保健所で開催された地域保健福祉活動報告会にて、スーパーバイザーとして活動した。管内市町村の保健福祉活動について 9 題の発表と、質疑応答を通して互いに研鑽する場となるよう参画した。

3) 高知市いきいき健康チャレンジでの学生ボランティア活動

5 月の『高知市いきいき健康チャレンジ 2024 スタートイベント』には 8 名、2 月の『高知市いきいき健康チャレンジ 2024 結果報告会』には 7 名の学生が教員とともに参加した。保健師を志望している学生が参加し、スタッフの保健師とともに主体的に会場誘導など担った。学生が保健師の活動を身近に感じることでできる機会を今後も大切にしたいと考える。

4) 高知県保健師交流大会

高知県保健師交流大会の実行委員を担い、交流大会の企画、実施、運営を、高知県内大学 3 校、市町村衛生職員協議会、高知県看護協会、全国保健師長会高知県支部、高知市、高知県の各団体から選出された 16 名と共に取り組んだ。今年度は、1 月 25 日（土）に行い、本学の学生 4 名を含め 67 名の参加があった。

2. 研究活動

1) 県内の新任期保健師の人材育成プログラムの評価に関する調査

人材育成ガイドラインの新任期保健師支援プログラムの評価を行うために、研究的に取り組んだ。これまで高知県健康政策部保健政策課が実施した、新任期保健師が取り組んだ研修成果「行動目標及び評価シート」の記載内容をデータとして使用し、行動目標及び到達状況の把握を行った。平成 31 年度より運用している、専門能力の「行動目標及び評価シート」の行動目標立案と、到達度の実態から、求められる能力の獲得状況を明らかにし、高知県にとって、課題解決の方策を得る機会になるとともに、大学は高知県の地域保健における課題解決への貢献につながるよう研究に取り組んでいる。

3. 評価

昨年の課題としていた新任期保健師の目標管理の到達状況の評価を、今年度は研究調査として行うことが出来た。結果は、人材育成評価検討会で報告するとともに、令和 7 年度の保健師人材育成

ガイドライン作成に反映させていく予定である。また、中堅期（前期）保健師研修会も、研修方法を前年度の反省も踏まえ、工夫していくことで好評を得ることができた。

4. 次年度の課題

高知県の保健師人材育成は、今後も新任期及び中堅期保健師を対象に、ガイドラインの改定や、研修内容の洗練化を行い、効果を検証しながら取り組んでいく。また、学部生に各自治体の保健事業へのボランティア活動への参加を啓発していくことで、地域看護活動の理解と共に、県内の保健師への就職支援にもつながるよう働きかけていく予定である。

＜看護管理学領域＞

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

【第1回ケア検討会】テーマ「病棟再編における中間管理職のジレンマ～職務満足度、患者満足度の高い部署を目指した取り組み～」

日時：令和6年6月14日（金）18:00～20:30 場所：オンライン会議開催（ZOOM）

参加者：32名（病院看護職23名、本学大学院生6名、教員3名）

内容：令和6年度1回目のケア検討会は、コロナ禍を経た病棟再建に伴う中間管理者のジレンマをメインテーマとして事例検討を行った。

話題提供者は、スタッフから中間管理職に昇進と同時に現在の病棟へ異動し、その病棟はCOVID-19への対応を行った病棟であった。異動当初はCOVID-19専門病棟として未曾有の事態に向き合ったスタッフの話を、傾聴することに努めて、スタッフと丁寧に関わろうと意識してコミュニケーションを取るようしていた。今年度、病棟再編により、当該診療科に対応した部署作りが行われた。しかし、その過程で患者・家族を中心に考えるのではなく、看護師が動きやすいことを最優先にする傾向や関わりが難しい患者さんを避けようとするスタッフの発言が気になっていた。スタッフは以前の病棟と比較する発言が目立ち、環境の変化に気持ちがついていけないように感じていることが語られた。このような状況において、経験豊富なスタッフの強みを活かした看護が提供され、患者満足度の高い部署へ変革していくにはどのような対応をしたら良いのかについて検討した。

COVID-19という未曾有の事態の中、当該病棟に配属となった看護師が経験した心理状態や看護の特徴について共有した。スタッフはCOVID-19の最前線で働くことへのプライドや誇りを持って看護をしていたこと、そして管理者が前面に立って可能な範囲で配慮が行われていた一方で、COVID-19専門病棟へ行く、COVID-19専門病棟から離れることに衝撃を感じる看護師がいたことなどが共有された。COVID-19専門病棟における看護師の体験の理解は、看護師同士であっても簡単な事ではないことが共有された。現在は、病棟再編や診療科の再編により様々な変革が求められており、COVID-19専門病棟での未曾有の事態への対応から絶え間ない変革が続いているとも考えられる。また、ベテラン看護師のスキルを活かすことができるよう、どのように環境を整え支援することができるのかについても議論された。変化や変革に不安や抵抗感を持つのは当たり前のことであり、その不安や反論を受けとめつつ、誰のための変革なのかについて気づくことができるように関わる必要があるという意見がでた。

話題提供者からは、これまでの経験を前向きに捉え、今後のスタッフへの関わり方についてヒントを得ることができたという意見が聞かれた。参加者は、コロナ対応のため調整を行った経験、コロナ対応を行ったスタッフへの対応を行った経験、あるいは何らかの変革を推進した経験を振り返ることができたという意見が聞かれた。また、今後経験する病棟再編や変革について、スタッフ支援についていろいろな方の意見を聞くことができ、共通する意見や異なる意見から学ぶ経験になったという感想が聞かれた。

【第2回ケア検討会】テーマ「プラチナナースがイキイキと働き続けられるための体制づくり」

日時：令和6年10月18日（金）18:30～20:15 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：19名（外部参加者11名、本学大学院生5名、教員3名）

内容：本年度2回目のケア検討会は「プラチナナースがイキイキと働き続けられるための体制づくり」というテーマで、管理職で定年を迎えた後、一般職として継続勤務をすることの難しさについて事例提供者からの現状の報告から議論が始まった。

まず、管理職が定年後に一般職員として働き続ける中での役割葛藤やモチベーションの低下の原因について様々な質疑応答があった。本人の思いとは別のところで、組織や社会制度を基盤とした病院のルール（処遇や配置等）に従って、就業を継続していることと同時に、定年後に評価される機会が減少することも要因の一つではないかという意見が交わされた。

また、管理職のプラチナナースがスタッフとして働く場合には、患者対応には問題がなくとも技術面に不安があることも多く、個々のナースの資格やスキルを活かした部署に配属できる配慮やプラチナナースを支える周囲のスタッフの理解やお互いに協力し合える職場風土を育むことの重要性について意見が出された。その他、ディスカッションの中では、管理職としてのスキルを活かして、次世代の管理者の育成という役割を付与することやプラチナナースのメンタルケアの場としてプラチナナース同士が語り合い、研修する場を設けることが必要では？という意見もあった。そして、今後は更に労働力人口減少が見込まれる医療現場において、誰もがいずれプラチナナースになるという視点を持ち、早い段階から準備を進める必要性についても確認された。

最後に、事例提供者から、今回の検討会を通して、他施設でも同じような悩みを抱えていることが共有でき、個々のナースのモチベーションを保つためのヒントやこれからプラチナナースがイキイキと働き続けるための体制創りに向けた一助となったことが共有された。

【リカレント教育&修了生・在学生との交流会】

日時：令和7年2月9日（日）13:30～15:30 場所：オンライン会議（ZOOM）

参加者：13名（修了生6名、大学院生4名 教員3名）

テーマ：「キャリア・プラトーって悪者？」

話題提供者は、看護管理領域の大学院院生で4日後に控えた EAFONS2025 (<http://eafons.org/>) で発表する一般演題「The Relationship Between Career Plateau and Career Self-Reliance Among Mid-Career Nurses（キャリア中期看護師のキャリア・プラトーとキャリア自律の関係）」を紹介することから議論が始まった。

この研究における看護職のキャリア・プラトーとは、「組織内において、現在以上の職業的発達が困難であると自覚している状態」と定義されているが、キャリア・プラトーには、ポジティブな側面もあるのではという問いを明らかにすることを目指した研究であった。

話題提供者からは「看護の魅力を見出すための具体的な支援はどのようなものがあるか？」、「キャリア・プラトーをきっかけに自律的に行動する可能性が実証されたが、実践現場でキャリア・プラトーに直面している看護師にどのような関わりをしたらよいか？」の2点について、修了生や先輩に助言が求められた。現場の看護管理者の立場にいる先輩からは、多様な働き方を支援、活用できる福利厚生等の支援制度を紹介、看護スタッフの将来を見据えた役割を付与、スタッフ一人ひとりの強みを引き出し信頼すること等、キャリア支援制度における透明性と公平性のバランスをとった運用について、具体的な示唆に富む議論が交わされた。参加者ひとり一人が自分自身の経験をふりかえり「キャリア・プラトー」と向かい合う貴重な機会となった。

2) 高知医療センターとの包括的連携事業

本年度は、看護管理学領域としての継続教育支援は、研修「グループマネジメント」の講師とマネジメントリフレクションを実施した。今年度より対象者を副科長以上とし、勤務時間内に変更して研修の回数も4回と増やした結果、延べ参加は138名となった。

高知医療センターの看護師への研究支援にも参加した。

3) 健康長寿研究センター事業への参加

入退院支援事業の研修事業「管理者研修」「看護管理者研修」「入退院支援コーディネーター能力修得研修」「入退院支援コーディネーター継続研修」「多職種協働研修」の研修の企画運営に参画し、講師を務めた。また、看護管理領域の院生の参加もあった（延べ参加人数 20 名）詳細は、令和 6 年度健康長寿センター報告書にて報告している。

2. 研究活動について

看護管理学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

3. 抄読会

看護管理学領域専攻の博士前期、後期課程の学生と看護管理学領域の教員が中心となって、週に 1 回実施している。本年度は、4 月第 1 週より遠隔会議システムを活用して、精力的に実施し、夏季、冬季休業期間を除いて、2 月末まで毎週継続した。10 月以降は、次年度博士前期課程に入学予定の者も参加して、論文のクリティークの実際を学ぶ場となった。プレゼンター及び司会は領域の博士前期課程の院生が中心になり、学生ひとり一人の理解度に応じて、研究手法の妥当性、統計手法再確認、実践への活用についての質疑を通して学びを深めた。本年の対象論文は、33 本、延べ参加者数は、246 名であった。

4. 評価

社会貢献活動の中で特に重視しているケア検討会と医療センターでの包括連携事業や健康長寿研究センターでの入退院支援事業、高幡地区のトリアージ訓練や BCP 関連活動等への学生の参加機会は増加した。

また、抄読会やケア検討会の運営についても、博士前期課程の学生のみならず、修了生や入学予定者まで広がり、次年度以降は他領域の学生まで参加予定である。今年度の目標である領域活動に留まらず健康長寿研究センター事業を軸とした大学全体の活動への拡がりは概ね達成できた。

5. 次年度の課題

次年度以降も、健康長寿研究センター事業や地域共生機構における事業を活用し、看護管理領域での活動の成果にもつなげていく。

＜共創看護学領域＞

1. 本年度の活動総括

共創看護学領域は開設 5 年目をむかえ、博士前期課程 5 名、博士後期課程 2 名が修了し、現在は博士後期課程 6 名が在学し学んでいる。本年度は、カリキュラムの運営と共に、研究コースとしての学生の研究活動促進へのサポートを中心に行っていった。

博士前期課程修了生 5 名のうち、3 名が修了後、高知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程に進学し、さらに研究を発展させている。また、もうひとり、学際的な視点の強化をめざし、他大学の博士後期課程に進学し、情報学を専攻し研究活動を継続している。臨床にかえったひとは、臨床において Evidence を活用していくことや臨床の視点から研究を発信することを目指し活躍している。

博士後期課程については、令和 6 年度 1 名の修了者がでた。

また、学生には、在学中から積極的に国際学会や学際的な学会へ投稿し発表を行うようにサポートを行った。令和 6 年度は、博士前期課程と博士後期課程の学生 2 名が韓国で開催された East Asia Forum of Nursing Scholars に投稿、採択されている。また、博士後期課程学生 1 名は、ヘルスコミュニケーション学会に、もう 1 人は日本自殺予防学会に投稿、採択された。学術雑誌への投稿についても、3 名が投稿し採択されている。今後も研究コースとしての活動の一環として、学会発表や紙上発表を位置づけサポートしていきたい。

さらに、今年度から、公聴会前に共創看護学領域に所属する学生に対しプレゼンする機会を作った。博士後期課程に所属する 5 名の学生が参加し、質問や感想を話し合うことができた。プレゼンターには公聴会に向けてプレゼンを洗練化する機会となり、同時に、参加者にとっても興味深い研究にふれる機会が持てたと好評であった。今後も共創看護学領域の取り組みの一つとして継続していきたい。

1) 研究活動

(1) 博士前期課程・博士後期課程

〔博士前期課程〕1 名が修了

〔博士後期課程〕学生 6 名　うち 1 名が修了

2 名が研究計画書提出、3 名が中間報告を終え一時論文提出に向けて分析を進めている

(2) 教員の研究活動

テーマ：障害文化と健常文化を超えて共創する支援のパターンランゲージ

科研基盤研究(C)2021 年－2024 年

研究代表者：畦地博子

本研究の目的は、障害者の多様性を認め、障害文化と健常文化を越えて共創する支援のあり方を探究することであり、多様性・文化の差異に配慮した優れた障害者支援(good practice)の実践知に内在しているパターンを明らかにし、説明力あるランゲージを提案することである。小児看護、精神看護、養護、老年看護などさまざまな看護領域の研究者と、文化人類学を専門とする研究者が学際的に協働して実施している。本年度は、研究倫理審査申請を行い、承認を得て、データ収集を行った。

テーマ：ポータブルデバイスおよび A I アプリを用いたポストコロナにおける非対面型遠隔看護

科研基盤研究(C) 2021 年－2025 年

研究代表者：池田光徳

本年度は、感情認識 AI 解析による「腹痛」の感情値を中心に検討を進めた。詳細は今後公的に発表する予定である。ウェアラブルデバイスを用いた呼吸運動のデータが収集できないか現在検討中である。

2. 本年度の評価と次年度の課題

来年度博士後期課程は 2 名の学生が入学予定であるが、本年度も博士前期課程の入学者がなく、来年度は研究コースで学びたいという博士前期課程の学生の獲得が課題である。また、令和 6 年度は特筆すべき社会貢献がなく、今後は領域としての社会貢献についても検討していきたい。

<災害・国際看護学領域>

1) 令和6年度の活動

①教育活動

今年度は、在籍生 DNGL3 名、博士後期課程 1 名、博士前期課程 2 年次 1 名の合計 5 名に対し、教授、特任教授各 1 名の体制で研究指導にあたった。専任教授 1 名に対して DNGL 運営委員長、学部授業、学外委員等、業務が集中したが、DNGL 1 名および前期課程 1 名が無事修了した。

1 名が災害看護副専攻プログラムの認定を受けた（2 人目）。

②大学の災害対策活動

本学の災害対策プロジェクトは、これまで当領域が中心的な役割を果たしてきたが、今年度から事務局が中心となるように体制が変更となった。このため、今年度は、新入生オリエンテーションで講義を行った以降は、合同災害訓練には領域として具体的な役割をもたず、高知医療センターとの合同会議にも年間通して出席する機会を得なかった。

このため、今年度の合同災害訓練と並行して、看護学部特別企画「大規模災害時の学生保護」に焦点を当てたワークショップを同日開催した。ワークショップの詳細は p. 31「災害看護をリードする活動」を参照のこと。

(1) 社会貢献

① 防災に関する活動

今年度新たに加わった能登半島地震関連事業を含め、本領域教員が高知県および高知市の各種委員、委員長を多数拝命し、貢献した。

今年度第二回県大立志塾は木下教授がリクエストを受けて災害看護に関するワークショップを企画、実施した。「探究★災害時こころと身体の健康」と題したワークショップには、県内の高校から多数の参加希望者をあつめ、大きな反響があった。また、オープンキャンパスの災害看護体験ブースでは、感染防護衣(N95 マスク等)の着用体験や、災害時情報システム COACHES アプリのデモンストラクションを実施した。

② 国際支援活動

2021 年の軍事クーデターにより内戦状態が続いているミャンマーに対する国際人道支援に関して、木下教授が日本の国際 NGO に専門的助言等、協力を継続しているが、今年度は日本政府による NGO 連携無償資金プロジェクトが隣国タイで開始されたことに伴い、2024 年 8 月に木下教授が保健医療専門家として現地に赴き、ローカル NGO の母子プロジェクトに関して指導助言を行った。

(2) 研究活動

昨年度から参加している緊急人道支援学会には、総会および研究フォーラムに出席し、研究交流を行った。災害・国際看護学領域として賛助会員登録しており、5 名までの参加費免除枠があり、参加勧奨と情報提供を行っている。日本災害看護学会には DNGL 在籍生以外に、本学の学部生も参加し、拡大している。2024 年 WSDN（世界災害看護学会）が神戸で開催されるにあたっては、日本災害医学会国際委員である木下教授が JADM-WSDN 連携ワーキング・グループのリーダーとして協力の調整にあたった。また、DNGL として 5 大学共著演題を発表したほか、本学教授が座長として登壇するなどして協力した。

上述の国際支援活動でタイーミャンマー国境地帯に支援に赴いた際に、現地では妊産婦保健に関するニーズがあることを確認し、2024 年 10 月より、タイーミャンマー国境付近における妊婦健診 (Antenatal Care) の実施状況を調べるリサーチ・プロジェクトを、現地医療機関、ローカル NPO と共同で開始した。今後は、領域としてこの活動に取り組む予定である。

2) 次年度活動方針

災害や国際は実習が困難な分野であるため、学生の理解が表面的、断片的になりやすい。本来の災害看護、国際看護は、どの看護専門分野においてもその専門性を反映しつつ実施すべき横断的技術であるが、ともすると「災害看護はDMATがやるもの」「国際看護とは海外に行かなければできない」など、誤解がみられる場合もある。学生の災害看護に対する理解を深めるためには、学部科目においては演習を行う機会を増やしていきたい。また大学院については、進学希望者の面接を十分行い、適性を見極めたうえで受験をするように勧めたい。少子化や全国的な大学新設に対応するためにも、実際の災害などの危機に際して高度な専門性を発揮して社会貢献できる優秀な人材の育成を目指したい。

<専門基礎領域>

1. 社会貢献活動

高知市が行っている「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」のイベントである『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」スタートイベント』、『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」応援講座～栄養編～』、『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」応援講座～運動編～』、『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」結果報告会』にて健康に関する体験ブースを出展した。加えて『「高知市いきいき健康チャレンジ 2024」結果報告会』では、立木が講演を行った。これ以外にも「高知市老人クラブ連合会鴨田ブロック健康まつり」や「第 19 回いきいき百歳大交流大会」に健康に関する体験ブースを出展した。さらに立木は、「高知市地域包括支援センター担当者連絡会」での講演をはじめいくつかの講演を行った。これ以外に研究に関する相談やコンサルテーションを県外の研究者に対して行った。

2. 研究活動

1) 専門基礎領域としての研究活動

専門基礎領域の研究として「フレイル予防のための疫学研究」（研究責任者：立木）を実施している。今年度は、ベースライン調査の一環として高知市で 2 回の調査を行った。調査に参加した対象者は 199 人であった。今年度、本研究は他学部のみならず他大学、病院と協力して行う他施設共同研究へと発展した。

2) 学部生の研究支援

4 回生の看護研究にて「日本人女子大学生の子宮頸がん予防行動と子宮頸がんに対する知識や意識との関連」と題して卒業論文の指導を行った。疫学及び統計学の基礎の復習からはじまり、研究計画、調査実施、論文執筆、研究発表などを基礎から指導した。

3) 大学院生の研究支援

大学院博士前期課程の研究コースの副指導では、N of 1 試験というこれまで看護学ではほぼ用いられていない研究手法を用いた研究を指導し、研究を通して新境地の開拓に必要なリテラシーの獲得方法なども含め指導した。

4) 研究成果の公表

立木は、日本人女性の骨粗鬆症予防を目指して行われている大規模コホート研究 Japanese Population-based Osteoporosis Study (JPOS Study)の現場責任者として 1 地域の追跡調査を無事に完遂した。これとは別に木質住宅と健康の関連の解明を目的としたコホート研究の追跡調査を実施した。JPOS Study のデータを用いて共著で執筆した論文が J Clin Endocrinol Metab (IF=5.0) に掲載された。また、共著として国際学会 2 件、国内学会 8 件の発表を行った。詳細は第 2 部の看護教員の活動を参照。

3. 活動の評価

1) 社会貢献活動の評価

本領域で行っている社会貢献活動は研究活動と連動したものであり、研究活動を基盤とした社会貢献活動を実施できたことは高評価に当たると考える。大学は研究機関であり教育機関でもある。研究機関という側面から、研究で得られた新しい知見をはじめとした知的財産を社会に発信し活用することで社会貢献を成し遂げることが一つの理想といえる。今年度の本領域の社会貢献活動はこれに基づく活動といえる。一方で、教育機関という側面では、地域に貢献できる人材育成は必ずしも十分に行えていない。これは、今年度本領域が現行体制となった初年度であったことも影響していると考えられる。

2) 研究活動の評価

領域で取り組んでいる「フレイル予防のための疫学研究」は、今年度の目標調査対象者数に届かなかった。また、本研究を運用する事務局体制が必ずしも十分とはいえない。資金面でもより多くの研究費の獲得が必要とされる。これらの課題に取り組むために、本研究の人的・資金的問題なども含めた研究体制の見直しのみならず、本領域の構成メンバーの研究に対する意識改革が必要といえる。

各メンバーにおいては、蓄積しているデータの研究報告が十分に行えていない。各自で研究に費やす時間を作る努力はしているが、領域内で研究、教育、社会貢献活動のバランスを考え研究時間を確保する方法を十分に検討できていない点は問題といえる。

学部生の看護研究では ICT を活用したゼミナール運営を実施した。これにより、学生同士が協力し研究に取り組む機会を増やし、活発なアクティブラーニングの実施を可能にした。また、特定の学生のみが研究に取り組むのではなく、すべての学生が研究に取り組むような工夫をしたことも活発なアクティブラーニングの実施につながった。

4. 次年度の課題

1) 社会貢献活動の次年度の課題

次年度も研究活動を基盤とした社会貢献活動を行うことを目標とする。今年度の地域に対する社会貢献活動は高知市のみであった。次年度は、高知市に対する社会貢献活動を継続しながら、高知市以外の地域での社会貢献活動が行えるようにすることが課題となる。この課題に取り組むために、「地域と共にある研究」、「地域に開かれた研究」を目指すことが要求される。

また、地域に貢献できる人材育成を通しての社会貢献活動を行えるための基盤づくりも課題といえる。この課題に取り組むために、領域の研究力を高めこれを教育力に還元し、地域に貢献できる人材育成を行える領域としての総合力を付けることが求められる。

2) 研究活動の次年度の課題

本領域で取り組んでいる「フレイル予防のための疫学研究」の次年度の課題は、事務局体制の再編と強化、研究費の獲得である。この課題を解決するために、研究班の全体の組織体系の見直しと再編も必要となる。また各メンバーが当事者意識を持ち自ら進んで研究に取り組む必要がある。

また、各メンバーの研究報告が十分に行えていない現状の改善も課題である。領域内で研究、教育、社会貢献活動のバランスを再考し、各メンバーの研究が推進される領域内の環境づくりが求められる。

領域で担当する看護研究では、今年度用いた評価に値する運営方法を活用しながら、より深い学びの場を提供していくことが課題となる。科学的・論理的思考をどのように定着させるかなどが具体的な課題となる。